

火災による被害をなくしましょう

火災による被害をなくすためには、日ごろから火災を発生させないよう注意するのはもちろんですが、万が一出火したときにどのように行動すべきか想定しておくことも大切です。被害を最小限におさえるために、家族、地域ぐるみで防火意識を高めましょう。

火災への備え

●就寝中など火災に気づきにくい状況でも、火災による煙や熱を感知して音声などの警報を発することで、火災を早く発見することができる住宅用火災警報器を設置する。

●被害の拡大を防ぐために消火器を備えておく。



もし出火したら…

■火災発生! 初期対応の3原則を覚えよう

出火の現場に居合わせたらまず「通報」、それから「初期消火」「避難」の順番で行動するのが原則です。ただ状況によって優先順位は異なりますので、逃げ遅れないように、あわてず冷静な判断を心がけましょう。

行動1 早く知らせる!

- 大きな声で「火事だー!」と叫び、隣近所に知らせる。声が出ない場合は、非常ベルを鳴らすか、やかんや鍋など音の出るものをたたかなどして異常を知らせる。
- どんなに小さな火事でも必ず119番に通報する。

行動2 早く消す!

- 火がまだ横に広がっているうちは消火が可能。
- 消火器や水だけでなく、座布団や毛布など手近なものを利用する。

行動3 早く逃げる!

- 天井まで火が燃え広がったら消火は困難。無理せず早めに避難する。
- 可能ならば、燃えている部屋の窓やドアを閉め、空気を遮断してから避難する。

消火器の使い方を覚えておきましょう

■消火器取り扱い訓練のときは、積極的に参加して体験しましょう。

■消火器の使い方

- 1 安全ピンに指をかけ、上に引き抜く。
- 2 ホースをはずして火元に向ける。
- 3 レバーを強く握って噴射する。



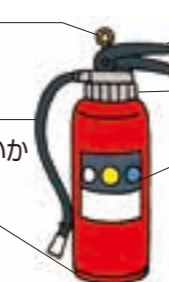
■消火器の構え方

- 1 火の風上にまわり、風上から構える。
- 2 やや腰を落として、低く構える。
- 3 熱や煙を避け、炎には真正面から向き合わない。
- 4 炎を狙うのではなく、火の根元を掃くように左右に振る。



■消火器は定期的に点検を!

- 安全ピン**
- 変形、破損はないか
 - 封印は切れていないか
- ホース**
- ひび割れ、ゆるみ、劣化はないか
- 本体・底部**
- サビや変形はないか
- 消火器の種類**
- 有効な使用用途を確認する
- レバー**
- 変形、破損はないか
- キャップ**
- 変形やゆるみはないか
- シール**
- 使用期限内か、使用期限年数を調べて書き加える
- ゲージがついている場合**
- 圧力を示す針が規定内にあるか



覚えておこう! 火元別の消火方法

■コンロ

- 油鍋に水をかけるのは厳禁。
- 消火器は離れた位置から、鍋の全面を覆うように向けて噴射する。
- 消火器がない場合は、シーツやバスタオルをぬらして手前からかぶせ、空気を遮断する。



■衣類

- 着衣に火がついたら、転げまわって火を消す。風呂場に残り湯があれば、浴槽に飛び込む。



■ストーブ

- 消火器は直接火元に向けて噴射する。
- 消火器がない場合は、シーツや毛布などをぬらして手前からすべらせるようにかぶせ、空気を遮断する。



■電気器具

- いきなり水をかけると感電の危険がある。コンセントかブレーカーを切り、消火器で消火する。



■カーテン・ふすま・障子

- カーテンは燃え広がる前に水をかける。できればレールから引きちぎり消火する。
- ふすまや障子などはけり倒して、踏み消す。その後、水をかけてしっかり消火する。



■たき火

- 消火器を使う。消火器がない場合は水や土で消す。
- 水の準備ができていない場合は、ほうきや木の枝でたたいて消し、その後、水でしっかり消火する。



■たばこ

- 寝たばこなどにより、布団などの綿製品が焦げた場合は、消したつもりでも見えないところに火種が残り、再び燃えだすことがあるので、浴槽などにつけ完全に消す。



逃げるタイミングは天井への延焼!

避難する目安は、天井まで火が燃え移ったとき。火が天井に燃え移るまでの間は初期消火に努めますが、もし炎が天井に燃え移ったら、けっして自分で消火をしようとせず、迷わずすぐに避難してください。



防災 チェックポイント

本当に恐ろしいのは煙です!

火災で発生する煙には、一酸化炭素などの有毒ガスが含まれています。吸い込むと中毒などにより命を落とす危険性があるので、次のポイントに気をつけながら避難しましょう。

- ぬらしたタオルやハンカチなどで、口と鼻を覆う(無理な場合は、ネクタイや衣類で代用する)。
- 短い距離なら息を止め、一気に走り抜ける。
- できるだけ姿勢を低くする。
- 視界が悪いときは壁づたいに避難する。



危険を感じたらすぐ避難しましょう

もっとも大切なのは、身の危険を感じたときに一刻も早く避難することです。服装や持ち物などにこだわらず、次のポイントを押さえながら、できるだけ早く避難してください。また、一度逃げ出したら、絶対に戻らないようにしましょう。

■2階から脱出するときは

ロープや縄ばしごを使って避難する。シーツやカーテンをつないだものでも代用できる。やむを得ず飛び降りるときは、布団やマットレスなどクッションになるものを落としそこを目がける。



■ビルにいるときは

上の階から出火した場合は、階段を使って下へ逃げる。下の階から出火した場合は、外階段から逃げる。もし下へ逃げられないときは、屋上の風上側で救助を待つ。エレベーターは絶対使わない。



■閉じ込められたときは

ドアのノブが熱い場合、廊下は高温状態の危険性もある。危険な場合はドアから出ず、ぬらしたタオルなどをドアのすき間などに埋めて防御し、窓を開けて逃げ遅れたことを外の人に知らせる。



■炎の中を通るときは

迷わずに一気に走り抜ける。ぬらしたシーツを体全体に巻きつけると効果的。

■スーパーなどでは

スーパーやホテルなどの商業施設で火事になったときは、店内の放送や誘導員の指示に従う。避難口がわからない場合は、誘導灯に従って壁づたいに避難する。

防災 チェックポイント

安全に避難するための7ポイント

- 1 天井に火が燃え移ったら、すぐに避難。
- 2 高齢者、子ども、病人を優先。
- 3 服装などにこだわらず、できるだけ早く避難。
- 4 ちゅうちょは禁物。一気に走り抜ける。
- 5 煙の中を逃げるときは、できるだけ姿勢を低く。
- 6 いったん逃げ出したら、再び中には戻らない。
- 7 逃げ遅れた人がいたら、消防隊にすぐ知らせる。

■住宅用防火機器を活用しよう

火災の発生を早く知らせる

〈住宅用火災警報器〉

煙や熱を感知すると、警報音で知らせてくれます。すべての住宅に設置が義務づけられています。



火災防止に

〈安全装置付調理器具〉

異常な加熱や火が消えた際に、自動的にガスの供給を止めます。



火災の被害を最小限に

〈防災品〉

火がついても燃え広がりにくい製品。カーテンやカーペット、寝具、エプロンなど。

〈住宅用消火器〉

小型で軽量タイプもあります。

〈簡易自動消火装置〉

火災の熱を感知すると、自動的に薬剤を放出します。

〈住宅用スプリンクラー装置〉

火災の熱を感知すると、部屋全体に放水します。



火災に対する備えをしておきましょう

ほとんどの火災は、わたしたちが注意することで防ぐことができます。火災を防ぐためのポイントをきちんと学び、日ごろからみんなで注意し合うようにしましょう。

1 放火対策を万全に

ゴミは指定日の朝に出すなど、家のまわりに燃えやすいものを置かない。車庫、物置などの戸締まりも忘れずにする。



2 コンロから離れない

コンロのまわりに燃えやすいものを置かない。火がついているコンロから離れるときは、必ず消すこと。



3 寝たばこ、ポイ捨ては厳禁

火がついたたばこを放置しない。喫煙するときには深い灰皿を使い、吸殻を捨てる時は必ず水につける。



4 子どもの火遊びに注意

子どもには火の安全な扱い方や怖さを教える。子どもの手の届くところにマッチやライターを置かない。



5 ストープのまわりを整理

衣類や布団など、ストーブのまわりに燃えるものを置かない。家具のそばにストーブを置かない。近くで洗濯物を乾かすのも危険。



6 配線まわりはきれいに

複数のコードをまとめたり、たこ足配線をしたりしない。コードの上にもものを載せるのも危険。コンセントまわりは定期的に掃除する。



7 風が強い日にたき火はしない

風が強い日や空気が乾燥しているところでのたき火は危険。必ず水を用意して、たき火の後は完全に消火したことを確認する。



防災 チェックポイント

「119」のかけ方を覚えておこう。通報時に伝える内容は、下記を参考に。

- 1 火災であることを伝える
- 2 火災現場の場所（住所や目印・ビルの名前）
- 3 何が燃えているか
- 4 けが人や逃げ遅れている人がいるか
- 5 かけている電話番号（携帯電話の場合は携帯電話の番号）
- 6 通報者の名前

〈携帯電話から通報する場合〉

携帯電話からの119番通報件数は、その普及に伴い年々増加しています。GPS機能付きの携帯電話からの通報については、「発信地表示システム」により通報者の直近住所が示されるので場所の特定がしやすくなりましたが、建物内からの通報の場合、位置情報の精度が落ちて場所の特定が難しいことがあります。携帯電話から通報するときは、次の点に注意してください。

- 近くの目標物（学校・公民館・信号機・ビル・店舗・コンビニなど）を確かめてから通報する。
- 自動車からの通報は、安全な場所に停車してからかける。
- 途中で切れないように注意する。
- 携帯電話からの通報は場所の特定が重要。あせらず、的確に伝える。